

絶滅危惧種になりきりって思いを伝えよう

授業者 弘島 智世 Jason Cole

1 本実践の教材について

本単元では “I live in / eat / have ---.” などの表現や関連語句を理解し “ I want ---.” などの表現と組み合わせながら、絶滅の危機にある動物のおかれた状況やその思いを伝え合うことや、その内容を英語で書いたり読んだりすることをねらいとしている。また、自分や身近なことについて英語で伝え合うこれまでの学習とは異なり、絶滅危惧種という社会的な問題を訴えるという、英語を学ぶことの意義を感じることのできる単元でもあると考える。

本単元のトピックである動物は、私たちにとって第三者的な立場である。しかし、この単元で子どもたちの用いる英語表現の主語は一人称 “I” であり、教科書にも「動物になったつもりで」単元を進めていく計画が設定されている。しかし、トピックである絶滅危惧種は、子どもたちの日常生活の中で身近に感じたり意識したりすることが少ない話題である。そのようなトピックにおいて、トピックとの出会い方や、英語を用いる場での場面設定等を工夫することで、子どもたちが興味関心を高めたり、伝えたいという思いをもったりすることができるようになる。そこで、単元の英語を用いる場面では、子どもたち自身が選んだ動物になりきりながら、英語表現を学習していく。「なりきる」として、動物に関する単なる知識の表出だけでなく、動物のおかれた状況を想像したり、子どもたちが「伝えたい」という思いをもって動物の思いを表現したりすることができるようになる。この単元は、中学校で取り扱う「社会的な話題」との接合点であると捉える。本単元のように身近なものと捉えにくいトピックを、小学校の発達段階では「なりきる」ことを通して英語で表現し合う活動が、中学校での「日常的な話題や社会的な話題」を中心とした学習の素地となると考える。

本単元のゴールはポスター（書くこと・読むこと）であるが、表現の学習や内容を考える際は、子どもたちが何度も表現に触れ正しい英語表現を身に付けたり、子どもたちの考えが表現に反映したりしやすいよう、音声を中心とした活動（話すこと・聞くこと）で展開していく。ポスターを書く際は、子どもたちが自分の英語表現を ICT 機器で録音し、それを繰り返し聞きながら文字に書き表していく。

“I live in the sea.” などの冠詞 “the” や、“I eat leaves.” などの単語の末尾の “s” などの細かな部分と一緒に確認するとともに、英語の文字や音、単語のまとまりに着目するよう促しながら、正しく書くことができるようになる。また、音声を中心とした言語活動場面では、動物になりきり、友達と動物のおかれた状況やその思いを伝え合う。そのような活動の中で、子どもたちが聞き手に伝わったのか、どのように感じたのかを確認しながら、伝える内容や伝え方を工夫できるようになる。以上のように単元を構成することで、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」に触れつつ、子どもたちが伝えたいという思いも大切にできると考える。

2 単元の構想

今回の実践では、次の3点をポイントとして単元を構想する。

- 単元導入では絶滅危惧種がいる現状に対する子どもの気付きを出し合い、興味や思いを深めた上で単元のゴールをともに設定することで、目的意識をもって学習に取り組めるようとする。
- 子どもが選んだ動物について「なりきって」伝え合う場づくりを行うことで、子どもたちが「伝えたい」という思いをもって表現活動に取り組むことができるようとする。
- 話す活動を書く活動に繋げる際には、ICT 機器を活用し子どもの英語の録音を聞き、冠詞や単語の末尾の音に着目させ、音声と文字を結び付けながら書くことができるようとする。

3 研究の視点に沿った具体的取り組み

(1) 相手や目的を意識してコミュニケーションを図りたくなる題材と課題設定の在り方

本単元では、トピックに対する子どもの興味・関心を高めるために、導入場面ではトピックをつかみながら絶滅危惧種について知り、子どもの思いを膨らませる場が必要になると考える。そこで教師が「絶滅危惧種についてどう思った？」等を問い合わせ、「絶滅危惧種について興味がない人・知らない人が多い」「絶滅危惧種について知らせたい」という子どもの思いを引き出す。その上で単元のゴールを子どもとともに設定する。その際、どんな人に思いを届けたいのか、ポスターを読んだ人にどのように感じてほしいのか、自分が伝えたい相手像や姿を具体的にし、活動の目的や相手意識を子どもたちと共有できるようにする。また、伝える動物を自己決定することで、主体的に活動に取り組むことができるようとする。さらに音声を中心した学習の場において、子どもたちは動物になりきり、動物として思いを伝え合う。そこで他の動物になりきった友達と発表し合う活動を繰り返し行うことで英語表現の定着を図るとともに、発表に対しての感想を伝え合う場を設定することで自分の発表内容を再考し、伝えたい内容がより伝わるよう考えることができるようとする。

(2) 見方・考え方を働きかせ、対話を通してよりよいコミュニケーションを行うための手立て

立場を明確にして英語を用いた発表場面では、伝えようとする内容に子どもたちが着目し考えることができるようとする。そのために、伝える相手にどのように思ってほしいのかを具体化し共有することで、ALTとともに表現の内容を考えたり吟味したりできるようとする。特に本時では自分が選んだ動物の思いをどう表現したらよいのか考え、互いに伝え合う中で内容を再考する児童の姿を目指す。のために、子どもたちがこれまで学習してきた表現の中から、どんな英語表現を用いるとよいのか考えたり、自分の伝えたい内容により合う表現を選択し用いたりする。また相手に伝わりやすくするために、伝えたい内容を日本語や英語で言い換え、分かりやすい言葉や表現にする場を設定する。

(3) 学習内容と思考過程を自覚し、よりよいコミュニケーションに向かうための手立て

振り返りでは、メタ的な振り返りとさらなる学習への動機付けを促す目的で、以下の2つの工夫を行う。1つ目は、言語活動の後に、自他の表現内容やその工夫・よさに気付くために行う。自分が選んだ動物になりきり、自己紹介をし、その動物がおかれた現状に対する思いを表現し合う場面では、子どもたちが表現したい内容と既習の表現を結び付けたり、そのために表現したい内容を異なる言葉に言い換えたりする必要がある。その思考過程を子どもと一緒に体験し、価値付けを行う。2つ目は授業の終末の記述による振り返りである。前時と本時の自己表現の違いや、本時追加された英語表現や表現を変えた子どもの思考過程や思いを振り返ることができるようにする。英語表現に直接現れにくい子どもの思考過程や思いを視覚化し共有し合うことで、伝える相手を意識した英語によるコミュニケーションを図ろうとする力を育てていきたい。